

特別企画・シンポジウム「異なる身体の『あいだ』にある舞踊」

* * * * *

南雲麻衣
NAGUMO Mai身体が多層性とあいだ ― きこえない身体の視点から見るリズムと表現※
“Multilayered Bodies: Between Rhythm and Expression, from a Deaf Perspective”

※本発表では、「間（ま）」を身体内部のリズムや動きの呼吸として、「あいだ」を身体と世界との関係の生成として用いる。

私は 3 歳半から聞こえない身体として育ち、5 歳の頃、テレビで楽しそうに踊る人を見て真似したことをきっかけにダンスを習い始めた。大学では和光大学で身体表現の授業を受け、大橋さつき先生のゼミに所属し、多様な身体性を持つ人たちと創作ダンスに明け暮れた。私はダンスを専門とするわけではないが、一人ひとりの異なる身体を通して「どう伝わるか」を探り、言葉の手前にある表現を追求してきた。ダンス、演劇、映像、ワークショップなど表現の媒体を変えながら、身体感覚や“あいだ”を異なる視座から見つめている。

幼いころ、保育士だった叔母がよく一緒に身体を動かして遊んでくれた。特に印象に残っているのは、リズムを音ではなく身体の動きで教えてくれたことである。叔母に誘導される動きの中で、私は「リズム」を音ではなく、身体の動きの順序や“間（ま）”として感じ取った。この経験が、私にとってのリズムの原点である。音のない世界でも、身体の中には確かにリズムが生まれる。右手と左手を交互に引っ張り合うように動かすと二つのリズムが生まれ、それが繰り返されることでリフレイン、つまり身体から育んだ私だけの「音楽」になる。こうして、私の中では「身体＝リズムを創造する場」という感覚が形成された。

音を手がかりに動く人の身体を見ると、まるで鼻の先に見えない糸がつながっていて、その糸が音の方向から引かれているように見える。同じ空間にいても、感じるリズムや“間（ま）”は人によって異なる。その違いをズレではなく多層性として受け止めることで、異なる身体が共に存在する場が見えてくるのではないかと考えている。

異なる身体と出会うことは、自分の身体を感じ方を更新することでもある。音の有無を超えて身体が世界とどう関わるかを見つめ直すとき、そこに“あいだ”が生まれる。その“あいだ”は、他者の感覚を知るためのものではなく、自分の身体を揺らがせる隙間のようなものかもしれない。異なる身体と出会うことは、その原点にもう一度触れることにつながるのではないかと考えている。

【プロフィール】

ダンサー、アーティスト、俳優。1989 年、神奈川県生まれ。和光大学現代人間学部卒。3 歳半で失聴、7 歳で人工内耳埋め込み手術を受ける。音声日本語を母語として育ち、大学で手話に出会う。文化施設の運営とワークショップなどの企画の仕事の傍ら、手話を活かしたパフォーマンスを軸に、ダンサー、アーティストとして活動を重ねてきた。近年は、音声言語と視覚言語を用いた複数言語の「ゆらぎ」をテーマにし、当事者自身が持つ身体感覚を媒介に、作品を生み出している。2023 年 12 月放送の NHK ドラマ「デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士」に出演し注目を集めた。

森田かずよ
MORITA Kazuyo

自身の創作から「異なり」をよみとく

ダンス研究家であるアン・クーパー・オルブライトは『Choreographing Difference』（p.58）の中で、「ダンスと障害の交差点は、身体能力、主観性、文化的可視性の重なり合う構造を探求する上で、非常に豊かな場所である」と主張する。私自身、いわゆる社会的に「障害」と呼ばれる身体とともにありながらダンスの世界にいる者として、この文章に励まされながらも、自分の身体や表現をどのような文脈で解釈していけばいいのか悩むことも多い。

彼女がここで定義する“Difference（違い）”は、いったい何なのか。単に私たちの身体の違いなのか。能力の違いなのか。表現の違いなのか。

ミュージカルをテレビで見たことを機にダンスをはじめた私は、西洋的なダンスにあらわれる規範的な身体と、自分の身体とのあいだにある差異をどのように埋めればいいのか、ただやみくもに身体を動かす日々を過ごした。だが他者と踊ることによって、私自身の「ダンスとは何か」という前提が大きく崩れ去ることに出会い、そこから「歩く」「呼吸する」といった人間の普遍的な動作をベースにした作品を創作するようになった。振り返れば、それは自らの身体を発見しなおす過程でもあった。他者の身体に触発されながら、自明とされてきた感覚や価値観を揺さぶり、自己の感覚を掘り起こしていく試みだったように思う。

生物学者であり哲学者でもあるユクスキュル（1864-1944）は、世界は客観的に一つではなく、主体の感覚・運動・身体構造によって異なる世界が生成されると述べ、それを「環世界」と呼んだ。私たちそれぞれの身体構造や感覚の仕組みによって、世界との関わり方や時間・空間の感受は異なる。この考えは、身体を探求するひとつの手掛かりとなるように感じ、わくわくさせられる。

ダンスは、身体を通して空間・時間・他者との関係を構築する芸術である。その意味で、ダンスとは新たな「環世界」を創造する行為でもある。私たちの創作は、人との「異なり」に触れ、既存の身体観や動作規範を逸脱することで、身体を介した世界の知覚や関係性の多様性を可視化する実践になりうるのではないか。

それは単に「健常者の身体との差」を描くことではなく、「異なる世界との共存・共鳴の試み」として捉えることができるだろう。今回は、ダンスにおける新たな発見をしてみたい。

【プロフィール】

ダンサー・俳優。大阪府大阪市出身。「Performance For All People-CONVEY-」主宰。二分脊椎症・側弯症を持って生まれ、18 歳より舞台表現の世界へ。東京 2020 パラリンピック開会式ソロダンサー。NHK ドラマ「パーセント」出演。「人と人のあいだにある差異をあたらしい価値観として捉える」をテーマに創作をおこなう。近年は多様な身体の人たちと共にダンスを創作、ワークショップなどもおこなう。福祉をたずねるクリエイティブマガジン「こここ」にて「森田かずよのクリエイションノート」を連載中。ミックスエイブルダンスカンパニーMi-Mi-Bi 所属。神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程修了。2024 年より大阪大学大学院人文学研究科人文学専攻(臨床哲学)博士後期課程に在籍中。

DAIKI（西村大樹）

「あいだ」に向き合う

私は、約 3 万人に 1 人の確率で出生する「軟骨無形成症」という低身長症の一種である障害を持って生まれた。主に低身長であることや、手足の短さ、側弯している腰や、O 脚の足が特徴である。また身体中の神経が筋肉の発達や年齢が進むと共に狭窄させやすく他にも合併症になりやすい。激しい運動には適さない身体ではあるが、幼い頃から身体を動かすのが大好きだった私は、ダンス(17 年)、野球(12 年)、バスケットボール、柔道(初段)など、様々なスポーツに挑戦してきた。

保健体育の中高教員免許取得を目指して進学した和光大学では、在籍中、身体への負担が大きいため、器械体操、柔道、陸上競技等の種目は、禁止とされていたが、教職課程で学んでいる中で「できない」ではなく「向き合い方」を考える授業を創りたいと考えるようになり、卒業研究にも挑んだ。そこで一番ヒントがあるのは、ダンスだと気づかされた。

元々、私はクランプというアメリカのサウスセントラルで生まれたダンスジャンルに取り組んでいたが、和光大学で大橋さつき先生と出会いダンスの幅広い可能性を教わった。一人一人の異なる身体特性によって、その人にしか出せない魅力があると考えられるようになった。それまでは、ずっと一人で踊っていたが、大学 4 年時には和光大学の仲間たちと全日本高校・大学ダンスフェスティバルに出場して、『訣別』という作品で、日本女子体育連盟会長賞を受賞した。その過程では、障害を理由に周りに迷惑をかけたくない、目立つ身体の自分が大会に出るだけで減点されるのではないかなど、自身の心の中にある負のイメージが強く自覚された。まさに、他者と踊ることを避けてきた自分に向かい合い、訣別するための、かけがえのない時間となった。現在は、一般社団法人 SOCIAL WORKEERZ で、『Dance For Social Inclusion』をスローガンとして誰しもが楽しめるイベントや、福祉施設への訪問、パフォーマンス、ワークショップ、講演などを主な活動をしているが、仲間たちと踊る喜びを軸に、人々の「あいだ」に生まれる何かを信じられるのは、当時があったおかげである。

また、「軟骨無形成症」の私は、日本における「障害」という定義に疑問を投げかける存在であると自認している。これほどの異なる身体性と困難を抱える難病でありながら、障害者手帳は取得でききないのである。同じように悩む人たちのためにも、自分のような存在や病気を知ってほしいという思いから、ダンサー・俳優としての活動を続けてきたが、これからは、社会で障害と呼ばれるものと健常と呼ばれるものの「あいだ」に、自分だからこそ立てるのではないかと考えており、問い続けるためのきっかけになる種蒔きをしていきたいと思っている。

【プロフィール】

1994 年生まれ、神奈川県横浜市出身。一般社団法人 SOCIAL WORKEERZ 代表。ダンサー、俳優、MC、ラジオ DJ としても活動。日本人初の低身長症当事者として保健体育科教員免許を取得。14 歳の時にクランプと出逢いダンスを始める。人の持つ可能性を 0 から 1 にする為、ダンスや教育、エンターテインメントを通じて、あらゆる人の社会参加や身体表現の可能性を広げている。2017 年、演出家、振付家としても活躍している宇山あゆみと出会い、師事。人と踊ること、創ることを心から見つめ直す。2019 年、任意団体 SOCIAL WORKEERZ(以下 SWZ)に加入。2019 年パラダンスバトルアジア大会では優勝。2022 年、SWZ 代表に就任。2022 年には、ケイティ・ペリーと共演。LIFULL 企業 CM、かんぼ生命企業 CM にも出演。2024 年、新しい学校のリーダーズと共演。『楽天スーパーナイター』では東京ドームでのサンボマスターとのステージの振付、演出を手掛ける。SWZ 副代表の YU-Ri と共に一般社団法人 SOCIAL WORKEERZ を立ち上げる。そして、ラジオ DJ としても『DAIKI の Inclusive Monday!〜教科書では学べないこと〜』をスタートさせた。俳優としてはアクセシビュティーマネジメントに所属し、2024 年、大河ドラマ『光る君へ』須麻流役として出演。自身は軟骨無形成症、パニック障害の当事者として活動しているが、身体の状態を考え 2026 年 3 月いっぱい、ダンサーとしての活動は一区切りとなる。そこに向かうため、2026 年 2 月 28 日に神楽坂セッションハウスにて初の DAIKI 自主公演『DANDRALL』開催予定。

細馬宏通
HOSOMA Hiromichi

ダンスの分析から詩の発見へ
“From the Analysis of Dance to the Discovery of Its Poetics”

ダンスの詩的機能を考える方法は一通りではない。そのダンサーが空間とどのような関わりを持っているかを考え、分析のための単位を見出し、それぞれのダンサーの環世界が更新される過程を記述するための妥当な方法を考える必要がある。本シンポジウムでは 3 人のダンサーが登壇し、わたしはそれぞれのダンスについて問いを立て、考える立場にある。何らかの仮説にしたがってダンスを一方的に解釈するのではなく、ダンスの微細な場面を探索的に分析し、そこにいかなる「詩」が埋め込まれているのかを共に発見することに注力したい。

【プロフィール】

1960 年生。行動学。早稲田大学文学学術院教授、滋賀県立大学名誉教授。日常の声と身体動作の研究を行うかたわら、視聴覚文化にも関心を寄せている。現在は、科研「認知症高齢者の訪問介護における「在宅」空間と身体配置の研究」の代表者として、利用者とヘルパーの相互行為分析に力を入れている。著書に『マンガはうたう』『フキダシ論』『二つの「この世界の片隅に」』『絵はがきの時代』『浅草十二階』（青土社）、『介護するからだ』（医学書院）、『うたのしくみ 増補完全版』（ぴあ）、『ELAN 入門』（ひつじ書房）、『いだてん噺』『今日の「あまちゃん」から』（河出書房新社）、『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか』（新潮選書）など。